

日本と台湾における乳幼児の移行対象の出現に関する比較文化研究

著者	王 怡今, 森定 美也子
雑誌名	聖路加国際大学紀要
巻	9
ページ	27-34
発行年	2023-03
URL	http://doi.org/10.34414/00016718



日本と台湾における 乳幼児の移行対象の出現に関する比較文化研究

王 怡今¹⁾* 森定美也子²⁾

Cross-cultural research on the appearance of transitional objects for infants in Taiwan and Japan

Yichin WANG¹⁾* Miyako MORISADA²⁾

[Abstract]

In this paper, we examined cross-cultural differences and similarities in the appearance of “transitional objects”, taking into account of variables such as mother–infant contact and maternal mindset regarding child-rearing. A survey targeting Japanese and Taiwanese mothers with infants was conducted and the result indicated that the occurrence rate of transitional object usage in Japan (50.2%) was lower than that of Taiwan (68.3%). However, the occurrence rate in Japan tended to be higher than in previous studies. In addition, the use of transitional object was more frequent in girls than in boys for both countries. The results also showed no correlation between “growth environment factors” and the emergence of transitional object usage. Regarding changes in maternal consciousness due to child-rearing, findings revealed that the Taiwanese mothers’ maternal consciousness increased more than the Japanese mothers. In both Japan and Taiwan, sensitive infants were more likely to use transitional objects when mothers had “psychological conflicts associated with child-rearing.” This result may be related to women’s social advancement as well as the recent increase in the number of dual-income and single-mother households.

[Key words] Transitional Objects, Cross-Cultural, Infants, Good Enough Mother

[要旨]

本稿では、「移行対象」の出現に関して異文化による差異や共通点を検討し、母親との接触要因や育児の心理状態から考察を加えた。乳幼児の母親を対象に調査を行った結果、日本の移行対象の出現率は50.2%であり、台湾より出現率が低い(68.3%)結果となったが、日本の移行対象出現率は先行研究よりも高い傾向が見られた。また男児より女児の方が、発現率が高いという結果は日本も台湾も同様であった。台湾と日本の調査結果からは移行対象の出現に「生育環境要因」が関与している可能性は見られなかった。母親の子育てによる母性意識の変化に関して、台湾の母親は日本の母親よりも全体的に母性意識の変化が高いことがわかった。また、日本と台湾両国において、母親が「育児に伴う心理的葛藤」を持つと、敏感な幼児は移行対象を使用しやすいという結果が得られた。この結果は、近年の女性の社会進出や共働き世帯、シングルマザーの増加とも関連している可能性がある。

[キーワード] 移行対象, 異文化, 乳幼児, ほどよい母親

1) 聖路加国際病院臨床心理室・Clinical Psychology Room, St. Luke’s International Hospital

2) 和歌山信愛女子短期大学・Wakayama shin-ai women’s junior college

I. 背景

乳幼児期の子どもが、特定のお気に入りのぬいぐるみや毛布、タオルなどを所持することがある。子どもは、寝る時にそれを顔に当てながら眠りに入り、目覚めているときには常に持ち歩く。このような、子どもにとってかけがえのない大切な所有物のことを「移行対象 (transitional object)」と呼ぶ。この用語は精神分析医でありながら小児科医でもあるウィニコット (Winnicott, D. W.) によって提唱された概念である。ウィニコットによれば、発達とは適度な環境と母子の相互交流によって、子どもの心の中に少しずつ心的内界の構造を築いていくことであり、漸進的な内在化と外在化の過程とのつりあいを保つ「中間領域 (intermediate area)」の存在があると主張している。またウィニコットは、この中間領域において、乳幼児が内的主観的世界から外的客観的世界への橋渡しをする機能を担うものを「移行対象」と名付け、乳幼児が外的現実を少しずつ受容していく発達過程において、不可欠な機能を担うと言及した¹⁾。

移行対象を出現させるためには、子どもにとって適度な養育環境が必要である。母親は乳幼児の成長に応じて、子どもの欲求を満たすことから徐々に手を引き、適度な欲求不満を乳幼児に生じさせる。そして、これが健全な愛着の基盤となる。ウィニコットは、このような母子関係の在り方を「ほどよい母親 (good enough mother)」と呼んだ。こうした母親の関わり方を通して、乳幼児は自分の欲求を必ず満たしてくれる母親との主観的な空想の世界である「錯覚 illusion」状態から目覚め、母親と自分は独立した存在であるという「脱錯覚 disillusion」を体験し、客観的外的現実を受容していくようになる。

こうして徐々に自分の思い通りにならなくなる外的現実を受容する乳幼児にとって、いつも自分の思い通りに存在している移行対象が、代理の対象として自分の欲求を満足させてくれることは、心の発達において重要な意味を持つ。ウィニコット¹⁾は移行対象について、赤ん坊が最初の「“自分でない”所有物 (“Not-Me”possession)」とし、テディ・ベア、人形や柔らかい玩具、または堅い玩具等への愛着に至るまでの一連の事象には、広範な多様性が見られると言及した。乳幼児は自分の思い通りにならず徐々に増大していく外的現実世界と直面する前に、移行対象のにおい、肌触り、暖かさ、感触などの感覚を母親との情動的体験と結びつけることができる。またそれを使用することによって、乳幼児は母親に対して経験していた「錯覚」を、自然な発達過程を損なわない形で想起することができる。このように移行対象は、親から離れて自我を確立する際に情緒発達を促す機能を持っている。

1. 移行対象の出現率

ウィニコットは、ほどよい母親を経験する子どもが一般的であるとし、移行対象は大半の子どもにみられる現象であると主張した。その後、移行対象の出現について多くの実証的研究がさまざまな異なる地域で行われ、ウィニコットの考え方は発達心理学の分野において、一つの定説として認められている。

移行対象に関して最初に研究を行ったのは Stevenson²⁾である。43人の子どもの対象に調査研究を行った結果、33人の子どもの移行対象を認め、残りの10名の子どもの全員過度の依存傾向が見られたと報告した。また、欧米圏あるいはアングロサクソン圏においても多くの調査が行われた。各国における移行対象の出現率は、イギリス79%、スウェーデン74.8%、アメリカ67.5%、アメリカの白人77.3%、ニュージーランド都市部90.1%など、いずれも高い出現率であることがわかった³⁾。このような実証的研究は、ウィニコットの見解を裏付けるものとなった。

移行対象の出現率に関する研究は、異なる文化の習慣や育児様式によって、他にも様々な結果が出ている。井原・木村⁴⁾が、主に欧米圏の6つの研究結果を平均したところ、移行対象の出現率は66%であることを報告している。Gaddini & Gaddini⁵⁾がローマ在住のアングロサクソン人に対して移行対象の研究を行った結果、出現率は61.5%であったが、同じローマに在住のイタリア人の出現率は31.1%であり、イタリア農村部の出現率は僅か4.9%であった。同様の調査をアメリカ人と韓国人に行ったところ、アメリカ人の出現率は54.0%であるのに対し、韓国人の出現率は僅か18.0%であった。また、中国の移行対象出現率は16.5%⁶⁾であることがわかっている。以上のように、移行対象に関する多くの研究により、さまざまな文化によって移行対象の出現率が異なるという結果が現れていることがわかる。Hong⁷⁾は、このような移行対象の出現率の相違について、①子どもとの添い寝の有無、②一人部屋や親と同じ部屋で眠るかというベッドの位置、③母乳を与えたかどうかという授乳様式、④母親との身体接触の頻度など、4つの育児様式の違いを挙げている。

これまで移行対象の出現率が高い欧米では、移行対象が欠如した場合、育児環境に問題があると考えられていた。しかし、Hongの理論から言えば、西洋文化においては乳幼児を早い時期に自立させるといった育児態度があり、乳幼児は、早期に自己を確立しなければならない環境に置かれる。このため乳幼児は、移行対象を創造し使用することによって、外界の現実環境に適応していくことができると考えられる。それに対し、吉田・浜崎・黒田⁸⁾らの調査で報告されているように、子どもが母親との添い寝によってスキンシップが多く行われる日本では

子どもにとって移行対象の必要性が相対的に低くなると考えられる。

2. 日本における移行対象の研究

日本における移行対象の出現率はそれぞれ、藤井⁸⁾の31.1%、遠藤⁹⁾の38.0%、井原⁶⁾の31.7%、黒川¹⁰⁾の32.0%、池内・藤原¹¹⁾38.8%など、出現率は30%台であり、欧米諸国に比べて比較的低い比率が示されている。井原ら¹²⁾によれば、日本では乳幼児が母親と一緒に眠るのが一般的であり、人工乳より母乳によって保育されることが多く、母親との身体接触がより多く、乳幼児が母親と一緒にいる時間が長いこと、母親を象徴化する必要が少ない。このことは前述したHong⁷⁾が主張しているように、日本における就寝時の環境や授乳様式において、母親との添い寝が一般的で、母乳を長く与えるなど、母親との身体接触が多いという育児習慣の影響があると考えられる。また、遠藤¹³⁾は母子関係において、母親の育児に対する葛藤が少なく、母親の養育行動が大きく変化しない場合、子どもは移行対象への愛着が生じにくくなると推察している。

一方、台湾の子育てにおいては共働き世帯が多く、子育てと自身のキャリア形成のはざまに葛藤することが多い。しかし子育ての時間は短くなるものの、日本と同様に添い寝の文化があり、身体的な接触の機会が多いことがわかっている。

これまでの論点から、欧米での移行対象の高い出現率は早期の母子分離に基づくことがわかる。日本や台湾の子育てでは欧米に比して、母子の接触の機会が維持されることが多く、ウィニコットの理論に基づけば移行対象の出現率は比較的低くなると考えられる。しかし王¹⁴⁾によると台湾の移行対象の出現率はこれまでの日本の研究と比べて比較的高かった。そこで本研究では、現在の日本と台湾の育児様式と移行対象の出現率について調査し、比較する。そして移行対象の出現要因についてさらに考察を深めていく。

II. 研究目的

王¹⁴⁾が台湾で移行対象の出現に関して行った研究では従来の研究結果と一致していない点が多いため、本研究では、王¹⁴⁾が台湾で移行対象調査を行った結果を踏まえて日本の移行対象の再調査の結果と比較し、以下の点を再検討することを目的とする。

- ①異文化においての移行対象の所持状況（使用の有無、性差、使用状況）の違い
- ②母親の関わり（生育環境や母親の母性意識）による移行対象の出現に与える影響

以上のように、台湾の結果と日本で再調査した結果の

間に共通点から見られる傾向に着目し、移行対象の発生要因を検討していきたい。

III. 研究方法

1. 調査時期

日本の調査は2016年7月～2017年1月に関東の保育園3園と関西の保育園3園と子育て広場に調査協力を依頼し、質問紙留置調査を実施した。

2. 調査対象

6歳以下（小学校入学以前）の乳幼児の母親を対象とし、日本は323名、台湾は164名¹⁴⁾が有効回答者であった（表1）。

表1. 台湾と日本の調査対象者数、性別と年齢

調査対象者数 (N)	性別		月齢
	男児 (N)	女児 (N)	M (SD)
台湾 (164)	84	80	50.1 (14.9)
日本 (323)	183	140	45.4 (20.2)

3. 調査内容

池内・藤原¹¹⁾の移行対象に対する調査の質問紙を基に、王¹⁴⁾が台湾で調査を行った際に使用した移行対象に関する項目と生育環境要因に関する項目のみを選出して調査を行った。具体的な質問項目は、子どもの年齢、性別、「移行対象に関する項目」として移行対象の存在の有無、種類、愛着を示し始めた時期、移行対象が特に必要とされる16の状況を選択してもらった。「生育環境要因に関する項目」は生後の授乳様式（母乳保育か人工乳）を含め、就寝様式（母親の添い寝の有無）、に関する質問項目を設けた。また母親としての意識変化は母性意識尺度¹⁵⁾を使用した。「母親であることが好きである」、「母親であるために自分の行動がかなり制限されている」といった12項目に対し、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの4件法で回答を求めた。

なお、本研究での「移行対象」は「乳幼児が肌身離さずに持ち歩き、それがないと著しく不安を感じる、主にぬいぐるみ、タオルや毛布などという無生物に対しての愛着物」と定義し、調査を行った。Gaddini&Gaddini⁵⁾は、手や指といった乳幼児自身の身体の一部や母親の身体の一部、おしゃぶり、また哺乳瓶を移行対象から除外し、これらを移行対象の前身という意味から「先駆物」と呼び、移行対象とは明確に区別している。本研究はこのような移行対象の分類にあたっては、愛着の発生時期を区別するため、おしゃぶりや哺乳瓶等を先駆物と定め、分類を行った。

4. 分析方法

本研究における日本のデータと王¹⁴⁾の調査における台湾のデータとの比較検討を行なった。王¹⁴⁾は、過去の欧米圏の移行対象出現率に関する研究や地域間・社会間比較を行った研究結果を踏まえて、台湾における移行対象について、2011年8月から10月に台北市と台中市の幼稚園2校で質問紙を用いて調査を行った。さらに移行対象の出現要因と消失の有無、時期および使用状況と生育環境要因について検討し、移行対象の出現率に台湾の子育て文化や育児態度などの社会的背景が影響していることを見出した。

本研究と王¹⁴⁾の調査におけるデータとの比較検討として、質問紙のそれぞれの項目について回答数、平均や標準偏差を算出した日本と台湾の数値でカイ二乗検定を行った(有意水準は $p < .05$ とした)。また母性意識尺度に関しても、質問内容の12項目を「育児に伴う満足感」、「育児に伴う心理的葛藤」、「育児に伴う嫌悪感情」、「育児に伴う心理的成長」という4つのカテゴリーに分けて、移行対象有群と無群ごとに平均点を求めて、 t 検定による比較を行った(有意水準は $p < .05$ とした)。

5. 倫理的配慮

調査協力者に質問紙を配布した際に、フェイスシートに本調査の目的および質問紙の内容やデータの扱い方、個人情報には厳重に保護することについて記載した。また、質問紙の調査は無記名で自由意志による参加であり、収集したデータは本研究以外の目的で使用しないことや結

果の公表等を説明し、同意した上で回答するように明記した。なお、本調査は東京国際大学倫理審査委員会(承認番号145701)による承認を受けて実施した。

IV. 結果

1. 移行対象の出現率と使用状況、内容

今回、日本で移行対象の出現に関する研究を再調査した結果50.2%(323名中162名)の出現率が認められ、従来の研究結果よりも高い出現率となった。一方、台湾での出現率は68.3%(164名中112名)であり、日本よりも移行対象の出現率が高いことがわかった($\chi^2=14.54$, $df=1$, $p < .05$)。また、子どもが移行対象を使用する状況を見ると、台湾では、順に眠るときや目が覚めた時に用いられるといった睡眠に関する状況が最も高く、次に独りの時、不安な時や旅行中、悲しい時に使用されるといった慰めに関する機能が多いことがわかった。一方、日本でも台湾と同じ眠る時に最も必要とされるが、その次は遊ぶ時という遊び機能が必要とされて、続いて目が覚めた時、独りの時、外出する時に使用されることが多いことがわかった(図1)。

また、具体的に使用されている移行対象の内容は日本と台湾ともにぬいぐるみが最も多く使用されており、さらに台湾ではタオル、毛布、枕など柔らかい布系のものが多く使われていることがわかった。日本では、毛布とタオルの使用率は高いが枕の使用は台湾よりも低かった。そして日本、台湾においてもミニカーの使用率が高

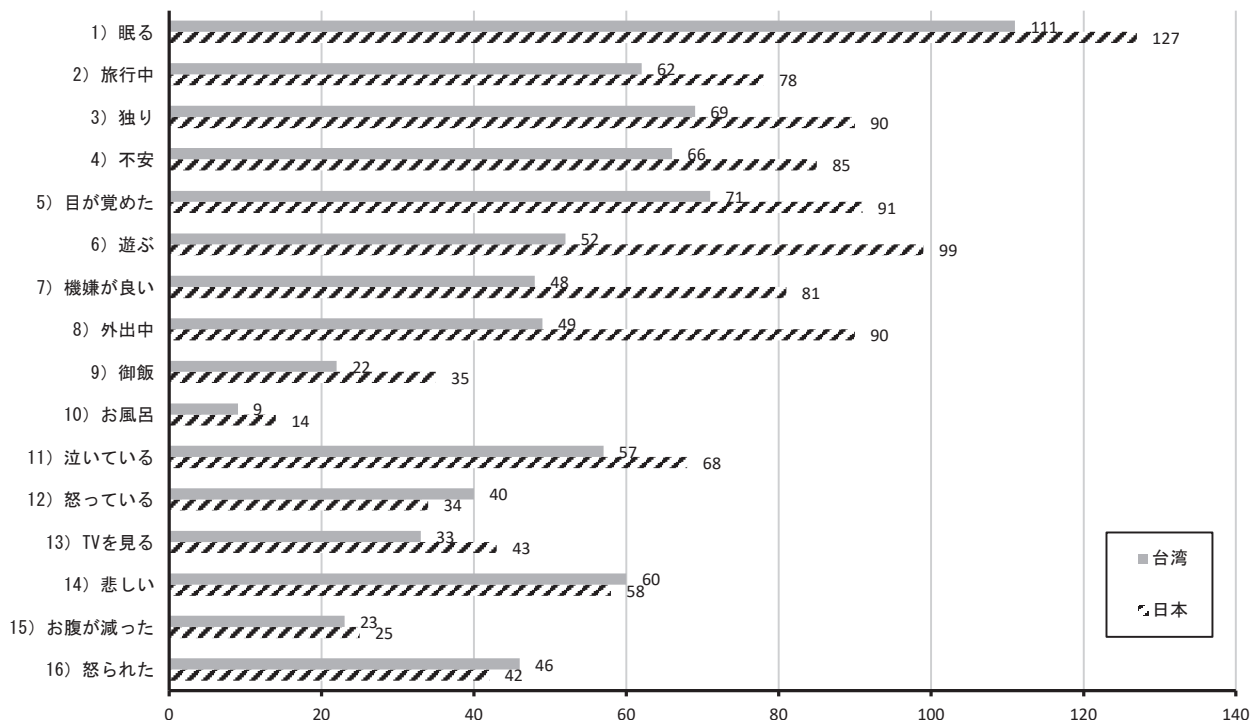


図1. 日本と台湾の移行対象使用状況 (N)

いことがわかった (図2)。

2. 移行対象の出現に関する性差 (図3)

移行対象の性差について、日本の女児52.2% (140名中73名) は男児48.6% (183名中89名) よりも出現しやすく、台湾においても同様に女児は78.8% (80名中63名)、男児は58.3% (84名中49名) と女児のほうが出現率が高いという結果が出ており、さらに台湾の女児は日本の女児よりも移行対象を持ちやすいという結果となった ($\chi^2=15.27, df=1, p<.05$)。

3. 移行対象の出現と生育環境要因 (表2)

日本の子どもの生後の母乳保育の有無と、就寝時の母親の添い寝の有無という就寝様式について検討した。その結果、母乳保育52% (221名中115名) と人工乳46.1% (102名中47名) の違いによる移行対象の出現率への影響は統計的に有意とならなかった ($\chi^2=0.99, df=1, n.s$)。しかし、寝る時に母親が添い寝しているかどうかとい

た質問に関しては、母親の添い寝がある子どもも52.5% (278名中146名) は添い寝がない子どもも35.6% (45名中16名) より移行対象の出現率が高いことがわかった ($\chi^2=4.46, df=1, p<.05$)。また、台湾と日本の結果を検討したところ、生育環境要因 (就寝様式と授乳様式) の違いによる出現率への影響は統計的に有意な差はみられなかった (順に、 $\chi^2=0.27, df=1, n.s$; $\chi^2=0.06, df=1, n.s$)。

表2. 日本と台湾の移行対象の出現と生育環境要因の比較

	添い寝の有無 % (N=移行対象所持/全体)		授乳様式 % (N=移行対象所持/全体)	
	有	無	母乳	人工乳
日本 (N 162/323)	52.5% (146/278)	35.6% (16/45)	52.0% (115/221)	46.1% (47/102)
χ^2 値	$\chi^2=4.46 *$		$\chi^2=0.99$	
台湾 (N 112/164)	68.2% (103/151)	69.2% (9/13)	64.3% (81/126)	81.6% (31/38)
χ^2 値	$\chi^2=0.01$		$\chi^2=4.03$	

* = p < .05

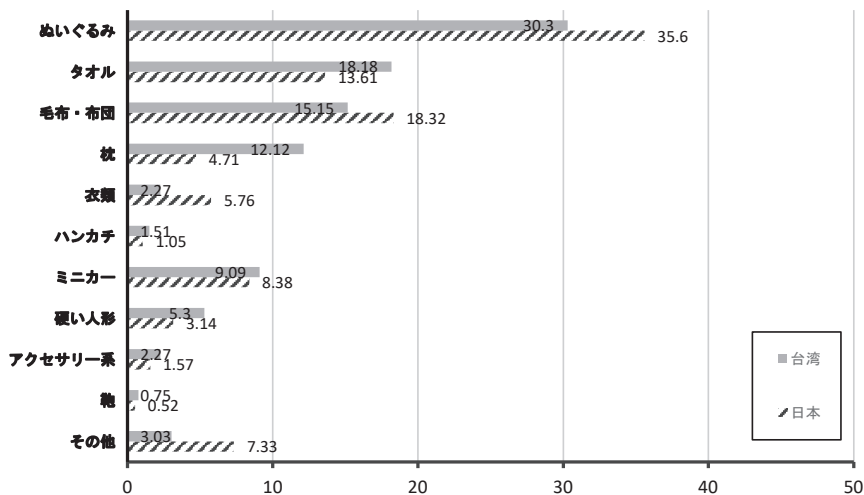


図2. 日本と台湾の移行対象種類の使用頻度 (%)

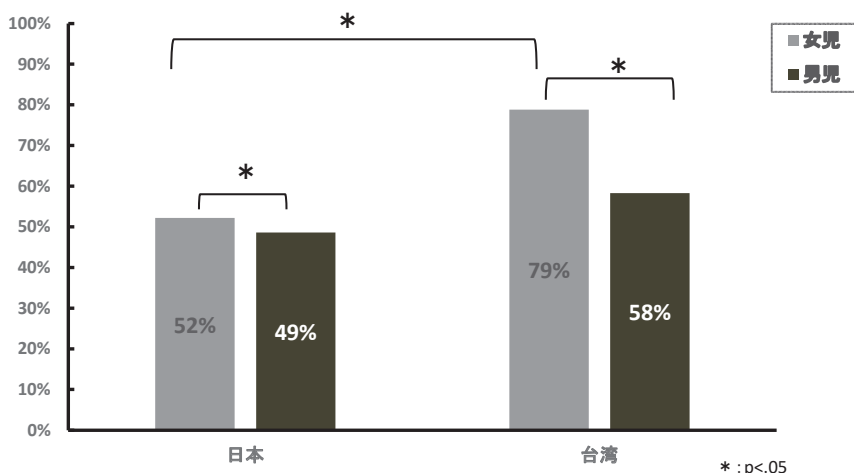


図3. 日本と台湾の移行対象の出現による性差

* : p < .05

4. 移行対象の出現と母親の母性意識

日本の母親において「母親としての意識変化」に関する質問と移行対象の出現との関連を検討したところ「育児に伴う嫌悪感情」と「育児に伴う心理的成長」の項目において、いずれも群間に有意差は認められなかった(順に、 $t = 1.88, df = 321, n.s$; $t = -1.76, df = 321, n.s$)。しかし、「育児に伴う満足感」と「育児に伴う心理的葛藤」(順に、 $t = -3.12, df = 321, p < .05$; $t = 3.26, df = 321, p < .05$)という項目においては有意な差がみられ、育児に満足度を高く感じている日本の母親の子どもは移行対象が出現しにくく、育児に心理的葛藤を抱く母親の子どもは移行対象の出現率が高いことがわかった(表3)。台湾と日本の結果に共通して、母親が「育児に伴う心理的葛藤」が高いと、子どもは移行対象を持ちやすいことがわかった。

さらに、移行対象の出現と母親としての意識変化に関して日本と台湾の結果を比較したところ、「育児に伴う満足感」($t = -6.99, df = 272, p < .05$)、「育児に伴う心理的葛藤」($t = -2.28, df = 272, p < .05$)、「育児に伴う嫌悪感情」($t = -4.13, df = 197, p < .05$)、「育児に伴う心理的成長」($t = -2.85, df = 272, p < .05$)の全ての項目において有意な差が認められた(表4)。従って、子どもが移行対象を所持している台湾の母親は日本の母親より母性意識の変化が強いことが示された。

V. 考察

本研究では日本の移行対象出現率の再調査を行った。その結果50.2%の出現率となり、従来の出現率30%台よりも高かった。これまでの研究によると、日本の母子間の身体接触は維持されやすいため、移行対象の出現率が比較的低下する可能性が考えられてきた。しかし今回、生後母子の接触を「生育環境要因」で検討した結果、添

い寝がある子どものほうが移行対象の出現率が高いことがわかった。日本では昔から家族の就寝様式が川の字で寝るという形が一般的であり、同室就寝は子育て文化の一つであると考えられる。吉田・浜崎・黒田¹⁰⁾が5歳までの乳幼児を調査した結果、男児84.4~92.1%, 女児85.3~92.9%はまだ添い寝をしていると報告している。日本では昔からこのような添い寝の文化背景があり、子どもの移行対象の出現率に影響する可能性は低いと考えられる。すなわち、今回の結果から母子間の身体接触の頻度は直接的に移行対象の出現と関連づけることが難しく、先行研究の結果を支持していないといえる。

また、日本と台湾の移行対象の種類と使用頻度から考えると、日本も台湾もぬいぐるみが最も使用されており(図2)、次にタオル、毛布・布団といった柔らかくて肌触りがよいものに愛着を持ちやすく、文化の違いによる差は殆ど見られなかった。また、移行対象の使用状況(図1)から考えると日本と台湾の子どもは、眠る時に最も移行対象を必要としている。日本の子どもの移行対象の所持状況については、「遊ぶ時」、「機嫌の良い時」、「外出する時」などが台湾の子どもの所持状況と比べて回答数が多かった。一方、台湾の子どもは、「怒っている時」、「悲しい時」、「怒られた時」などに、移行対象によって“慰め”や“沈静化”するといった感情調節機能として使用していることが多かった。台湾の子どもは日本の子どもよりも、柔らかい素材の感触から母親を象徴する母性的イメージを抱くことが多く、暖かさや安心感を重視する可能性があるかと推測できる。

移行対象の性差について「女兒は男児より移行対象を持ちやすい」という結果となった。これはすでに多くの研究で報告されており、本研究も先行研究を支持した結果となった。原因として、男児と女兒の生得的感受性の違い¹³⁾や、性的な役割意識が親の男女の育て方に影響し、男児には移行対象に対しての愛着が生じにくい環境で育

表3. 日本における移行対象の出現と母親の育児意識の比較

移行対象 (N)	育児に伴う満足感 M±SD	育児に伴う心理的葛藤 M±SD	育児に伴う嫌悪感情 M±SD	育児に伴う心理的成長 M±SD
有 (N=162)	2.66±0.88	2.66±0.94	1.94±0.84	3.07±0.79
無 (N=161)	2.86±0.89	2.43±0.90	1.82±0.88	3.19±0.76

* = p < .05

表4. 日本と台湾の移行対象の出現と母親の育児意識の比較

移行対象あり群 (N)	育児に伴う満足感 M±SD	育児に伴う心理的葛藤 M±SD	育児に伴う嫌悪感情 M±SD	育児に伴う心理的成長 M±SD
日本 (N=162)	2.66±0.88	2.66±0.94	1.94±0.84	3.07±0.79
台湾 (N=112)	2.84±0.87	2.85±0.97	2.24±1.03	3.27±0.78

* = p < .05

てられていることなどが挙げられる¹⁷⁾。今回の結果から女兒は男児より移行対象が出現しやすく、この点においては文化による影響が少ないと考えられる。

本研究において、移行対象の出現率では日本と台湾で差がみられた。台湾の移行対象出現率は日本よりも高く、この結果を母親の関わり（生育環境要因と母親の母性意識）が移行対象の出現に与える影響として検討していきたい。

今回台湾と日本の母親を比較した結果、移行対象の出現に「生育環境要因」が影響している可能性は見られなかった。上述したように母親との身体接触の頻度と移行対象の出現を安易に結び付けることはできず、今後さらなる検討の余地が残されている。一方、母親の子育てによる母性意識の変化に関して、「育児に伴う心理的葛藤」を持つ母親の子どもは移行対象を使用しやすく、子どもが移行対象を所持している台湾の母親は日本の母親よりも全体的に母性意識変化が高いことがわかった。従って、本研究の結果から異文化間で母親としての意識変化の違いによって子どもの移行対象の出現率が異なるという仮説を支持する結果となった。

大日向¹⁵⁾によると、母性意識は肯定的側面と否定的側面があり、それは女性の本能として生まれながらに備わっているものではなく、生育過程や妊娠、出産ならびに育児体験を通して形成され、発達するものであると述べている。子どもが移行対象を所持している台湾の母親は、日本の母親よりも子育て経験を通して母親としての肯定的感情と否定的な感情の両者を強く体験しており、このような母子関係の相互作用の変化は子どもに何らかの影響を与え、高い移行対象の出現率に繋がったと推測できる。

また、今回の結果から日本と台湾という二つの国の文化においても「育児に伴う心理的葛藤」をもつ母親の子どもには、移行対象が出現しやすいという傾向が見られた。この結果は、遠藤⁹⁾の調査結果とほぼ同様の結果を示している。遠藤⁹⁾は育児に葛藤を与えやすく、時に自分への関心を育児以上に優先させやすい母親は、子どもにとって何らかのストレス状況と関連し、結果的に移行対象の発現を促している部分があると指摘している。母親が葛藤を感じながら子どもの世話をを行うと、それを敏感に感じ取った乳幼児は早い段階で母親との心理的密着度の低さを感じ、不安やストレスから自分を守るため、移行対象が現れやすくなる可能性がある。この母親の育児態度に関する点において、清水¹⁸⁾は欧米化した社会や共働き、シングルマザーの増加などの要因を挙げている。日本の厚生労働省は平成25年の調査¹⁹⁾で、1997年以降共働き家庭は専業主婦世帯数を上回り、その後も増加を続けていると報告している。また、日本は外国に比べると、幼い子どものいる母親の就業率は低い水準にあるが、働

いていない母親であっても就業希望のある者は多く、0～3歳の末子をもつ母親の就業希望者は最も多く、全体の24.9%を占めていることがわかっている。一方、王¹⁴⁾が台湾で調査を行った際の台湾の行政主計処²⁰⁾は、家庭収入調査において2009年度「女性が世帯の経済主要負担者となった比率は26.3%であり、10年前よりも7.6%増加し、1994年より12.7%も増えた」という結果を報告している。またこうした背景として、近年女性は、社会の教育水準の上昇により、職業現場に入る機会が増え、女性の経済能力が高くなるにつれ、世帯の収入において主な負担者となっている割合が高くなっていると考えられる。

母親が自分の才能を活かせる職場で満足感を抱きながら子育てをすることは、育児に対する葛藤と結びつき、時に自分自身の気持ちを育児よりも優先させることが考えられる。また、家庭の経済的な負担や経済的自立を考慮しながら育児をすることで、以前よりも育児に専念しづらい状況を招き、それが子どもにとってはストレス・不安状況となり、結果的に子どもの移行対象の発現を促すことになる可能性があると考えられる。

今後の課題

本研究は多くの先行研究と同じく、母親を対象にして調査を行った。しかし、母親の関わりによる生育環境要因を移行対象の出現と結びつけることはできなかった。母親の母性意識の変化による育児態度は移行対象の出現と関係している可能性が高いと考えられるが、今後母親としての女性が社会進出する意識や状況を把握し、子どもの移行対象の出現に繋がる可能性を検討する必要があると思われる。さらに多くの先行研究では子どもが移行対象を使用することに心理的分離の意味をもつという見解を示している。今後調査対象を子ども自身を加え、母親との心理的密着度と子どもにとって移行対象をもつ意味を分析することを通して移行対象が所持される現状をより明確に理解することができると考えられる。

謝辞

本研究は平成28年度和歌山信愛短期大学きょう育の和センター教育研究助成を受けて実施したものである。質問紙調査にご協力下さった母親の皆様には深く感謝を申し上げます。

引用文献

- 1) Winnicott WD. Transitional objects and transitional phenomena. *International Journal of Psychoanalysis*. 1953; 34: 89-97.
- 2) Stevenson O. The first treasured possession. *The Psychoanalytic Study of the Child*. 1954; 9(1):199-217.
- 3) 遠藤利彦. 移行対象に関する理論的考察—特にその

- 発現の機序をめぐって. 東京大学教育学部紀要. 1990; 29:229-241.
- 4) 井原成男, 木村涼子. 移行対象の発達の意味—移行対象がさまざまな現れ方をした3症例からの検討. 小児の精神と神経. 1986;26(1):57-63.
 - 5) Gaddini R, Gaddini E. Transitional objects and the process of individuation. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*. 1970;9(2):347-365.
 - 6) 井原成男. ぬいぐるみの心理学—子どもの発達と臨床心理学への招待. 東京: 日本小児医事出版社; 1996.
 - 7) Hong KM. The transitional phenomena: A theoretical integration. *The Psychoanalytic Study of the Child*. 1978;33(1):47-79.
 - 8) 藤井京子. 移行対象の使用に関する発達の研究. *教育心理学研究*. 1985;33(2):106-114.
 - 9) 遠藤利彦. 移行対象の発生的説明: 移行対象と母性的関わり. *発達心理学研究*. 1990;1(1):59-69.
 - 10) 黒川嘉子. 乳幼児の就眠時行動に関する理論的考察—狭義の移行対象論から自己調節論へと視点をうつして. *京都大学大学院教育学研究科紀要*. 1999;45:342-352.
 - 11) 池内裕美, 藤原武弘. 移行対象の出現・消失に関する社会心理学的規定因の検討: 生育環境と夫婦間ストレスの視点から. *社会心理学研究*. 2004;19(3):184-194.
 - 12) 井原成男, 橋爪千恵子, 日浅美由紀ほか. 移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学. 東京: 岩崎学術出版; 2006.
 - 13) 遠藤利彦. 移行対象と母子間アタッチメント. *教育心理学研究*. 1991;39(3):243-252.
 - 14) 王怡今. 台湾における移行対象の出現. 消失に関する研究: 生育環境の視点から. 東京国際大学臨床心理学研究科修士論文. 2011.
 - 15) 大日向雅美. 母性の研究—その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証. 東京: 川島書店; 1988.
 - 16) 吉田美奈, 浜崎隆司, 黒田みゆき. 幼児の添い寝に関する実態調査. *上田女子短期大学紀要*. 2018;41:1-16.
 - 17) 王怡今. 青年期以降の移行対象—アニミズム的思考と対人様式との関係から—. *東京国際大学臨床心理学研究*. 2016;(14):1-17.
 - 18) 清水幸子. 移行対象経験が青年期の対人様式や自尊感情に与える影響. *人間科学研究*. 2012;25(1):150.
 - 19) 厚生労働白書 [平成25年度専業主婦世帯と共働き世帯の推移] [Internet]. <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/backdata/> [参照 2019-7-10]
 - 20) 台湾行政院主計處. 性別圖像—工作與家庭的平衡主計月刊. 中國主計協進社發行. 2011;669:28-43.